

生命保険文化センター賞

母の履歴書

兵庫県 明石市立大久保北中学校 三学年

玉田 麗

「白髪が増えたく。」

「うわっ、シミやん、シワやん。」

鏡の前で大騒ぎしている母。まだまだ若いと思っていたが、母も年を取ったなど実感する。

毎日、新聞をめくれば、少子高齢化、先細る公的年金、消費税UPなど、将来に不安を抱かせる記事を見ない日はない。

母たち世代が、年老いた時、公的年金がもらえるのであろうか疑問に思う。

「お母さん。お母さんたちが年を取ったら年金ってもらえるの？」  
「大丈夫。」

にやりと母が笑う。その余裕はいったいどこからくるのだろうか。

母が自慢げに重要と書かれた、少し古びた書類を大事そうに持ってきた。

表には、契約日平成五年一月一日、私の知らない住所、旧姓で書かれた母の名前、年齢二十三歳、性別女、払済五十五歳、年金開始六十歳、保障内容も記載され、裏には、姓変更、住所変更などをした何枚もの紙が貼られている。

これは、二十二年前、母が加入した個人年金保険の証券だ。

個人年金保険とは、老後の生活資金準備のために、個人で加入する生命保険の一種である。平成二十一年度の調べでは、三十歳前半でこの保険に加入しているのは、わずか十二パーセントほどだという。若い世代には関心が薄いようだ。

しかし、母は、個人年金の必要性を予測していたのか、なんと二十三歳で加入していたのだ。

若い時に将来を見据えて保険に加入することは容易なことではない。けれど、加入することにより、また、掛け続けることにより、安心して歳を重ねることができるようだ。

「続けてきてよかった。」

母が、しみじみと言う。

母も現在に至るまでには、結婚、出産、父の転職、四度の転居な

## 第52回中学生作文コンクール

ど、生活環境の変化を経験し、保険料が負担だと、幾度か解約しようと考えたこともあったらしい。しかし、毎年、税金の控除が受けられること、金利がよいことなど、メリットも多々あり、二十二年間、何とかやりくりし、掛け続けることができたと話してくれた。

この証券には、母の歴史が刻まれている。まるで、人生を共に歩んできた『母の履歴書』のようだ。

病院嫌いの母は、誰よりも健康だと定期健診に行こうとしない。

「大丈夫。」

またしても余裕の顔だ。

もし、万が一、病気を早期発見できたなら、加入している保険が役に立つ。大丈夫と言わず、健診を受けてほしい。面と向かって、なかなか言えないが、何が何でも母には長生きをしてほしい。

私は、両親の面倒を見る覚悟ができている。母が大切にしてきた保険と、私の愛で、

「大丈夫。」

何の根拠もない母の口癖がうつってしまったようだ。